

分科会 2

「県境を越える規模の大災害へのボランティアの広域連携」

資料

- (1) 議事次第 ————— 1
- (2) 小野田全宏氏「東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク 静岡県内外
の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」————— 2
- (3) 市川啓一氏 「災害ボランティア情報支援について」————— 9

平成 1 8 年 8 月 2 5 日

分科会 2

「県境を越える規模の大災害へのボランティアの広域連携」

議 事 次 第

平成 18 年 8 月 25 日 (金) 11:30 ~ 15:00

名古屋大学環境総合館 (愛知県名古屋市)

1. 広域ボランティアセンターについて (11:30 ~ 13:00)

- 昼食をとりながら進行 -

- ・ 話題提供 1 「東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク
静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」
小野田全宏氏 (特定非営利活動法人 静岡県ボランティア協会 常務理事)
- ・ 意見交換

2. 見学 - 4 階 (13:00 ~ 13:30)

3. 広域連携のための情報について (13:30 ~ 14:40)

- ・ 話題提供 2 「災害ボランティア情報支援について」
市川啓一氏 (株式会社レスキューナウ 代表取締役)
- ・ 意見交換 (ワークショップ形式等)

4. 振り返り (14:40 ~ 15:00)

東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク

静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練

オリエンテーション資料

開催日：平成18年2月25日（土）
会 場：静岡市立城内中学校体育館

1. 今回「図上訓練」のねらい

- ・ 地域防災局が置かれている4箇所の「支援センター」開設を想定した訓練とする。
- ・ 地域エリアごとの市町災害ボランティア本部の立ち上げと活動支援をする広域（中間）拠点の運営を考える。
- ・ 先ずは県内団体が、地元を大切になるべく自分たちの力でやりとげるように、地域で完結する対応を考える。
- ・ その上で、県外ボランティアの支援が必要になった場合に、どのように支援を求め連携するかを考える。
- ・ 地域ごとのボランティア団体、社協、行政間の顔が見える関係をつくると共に、ボランティア団体が災害に備えて実践的な活動に取り組んでいることを、広く県民に広報していく。

2. 設定条件

想定被害は静岡県第3次地震被害想定結果に基づく。

冬（2月）の平日の朝5時、地震発生とし、訓練は発災後7日目からの対応行動とする。各センター・機関間の連絡手段は、MCA無線が使用可能のほか、一般電話は、一部で輻輳規制が残っているが、おおむね使用可能。（インターネットも）

3. チーム編成

県内ボランティア				県外ボランティア		統制班
（4支援センター）				東日本	西日本	・ 静岡県災害ボランティア本部・情報センター
賀 茂	東 部	中 部	西 部			
A	A、B	A、B、C、D	A、B、C、D			

チーム間の連絡（報告や連絡、問い合わせ、指示、回答等）はすべて、「連絡表」に書いて届けることによっておこないます。（複数のチームがある場合はAに届けてください。）

静岡県、その他チーム以外の防災諸機関の役割は、統制班が代行します。

4. チーム内の役割

1. リーダー	常に他との連携を重視しながら、時間経過の中で優先度の高いものからテキパキと対応していきます。
2. 情報係	付与された状況付与票を大きな声で読み上げ、共通認識をはかります。
3. 記録係	チームとしてとった対応行動の要点を「対応記録表」に記録します。
4. 報告者	F1、F2、F3の対応行動のまとめを報告し、今後の課題について提案します。

5. タイムスケジュール（各局面のねらい）

当日の進行によって変える場合があります。

11:30	開会（チーム別テーブル）
	挨拶 静岡県防災局防災情報室 / 静岡県ボランティア協会
11:40～11:55	オリエンテーション / 訓練のすすめ方
11:55～12:10	作戦会議（チームリーダー、情報係、記録係、報告者を選出）
12:10～12:50 （F 1） 40 分 状況付与 1 回	訓練 / 発災当日～6日間（2月19日～24日） “市町ボランティア本部の立上げ状況を確認し、被害想定に基づいた被災地の被災状況をイメージし、プレイヤーの共通認識をはかる” 1. 県内Vチームは、まだ参集していません。ここでは、発災後の各参加団体の6日目頃まで「どのように行動しているか」をイメージし、担当地域の各市町V本部の立ち上げ状況を検証し、「設置状況を一覧」にまとめます。 2. すでに立ち上げて活動している市町は 期日、場所、要員体制、活動内容を、まだ立ち上がっていない市町は 予定期日を設定してください。 3. 県外Vチームは、東日本・西日本チームに分かれて、発災～6日目ころまでの間にそれぞれの参加団体が「どのような活動を開始しているか」をイメージし、先見調査隊および本隊の派遣計画、期日、場所とルート、他のV団体との連携方法、独自展開能力の有無などをまとめて下さい。
12:50～13:30	～昼食休憩～ （食事をしながら交流・作戦会議？）
13:30～15:00	訓練 / 発災7～8日目「各支援センターの立ち上げと市町VC立ち上げ支援」 【発災7日目（2月25日）】 “市町V本部の後方拠点である支援センターを立ち上げ、管内の市町V本部をどう支援していくかを考える” 1. 県内V団体及びボランティアコーディネーターは、4カ所の支援センター設置場所に参集し、「支援センター」の立ち上げを行ない、初動体制（役割分担等）を構築します。 2. 各「支援センター」は、配布されている各市町別の被害想定データから、各市町の地域・住民の被害状況を想像し、F1でまとめた各市町V本部の立ち上げ現状をふまえながら、初期（おおよそ1週間くらい）の「支援対策計画」をまとめて下さい。 3. 県外ボランティアは、県災害ボランティア本部から要請を受けていずれかの「支援センター」に順次参集し、県内チームの対応状況を見ながら、どのような連携支援が可能かを考えます。
（F 2） 40 分 状況付与 2 回	
（F 3） 40 分 状況付与 2 回	【発災8日目（2月26日）】 “広域連携が必要とされている中で、中間拠点としての支援センターの具体的役割について考える” 1. 各「支援センター」は、活動を始めた市町V本部間を調整し、立ち上げが遅れている市町V本部立ち上げを支援します。 2. 各地域の活動が始まり、対応すべき課題が次々に付与されます。「支援センター」として地域内の総合的な調整の役割を考えます。 3. 県外ボランティアは、必要に応じて、運営の協力・助言を行いながら、要請があった場合の支援行動、あるいは独自行動について考えます。
10 分	各チーム対応行動まとめ 作業
15:00～15:50	各チームの発表とディスカッション / 訓練の成果と今後の課題について
15:50～16:00	講評
16:00	閉会（アンケート提出）

図上訓練チーム別報告書

東日本（記録者：矢野正広）

	今回の訓練に参加したプレイヤーの総括について	
	確認できたこと及び思われること	出された課題・傾向
訓練実施の目的について、プレイヤーの共通認識が図れましたか。	最初の状況の付与の段階では、意味は理解したが、やっているうちに(特に県外のよそ者が静岡各地に机に分かれた段階で)地元VC運営者の困惑を目の当たりにしたので、彼らの精神的なバックアップをして盛り上げてから協議に入った。ので、広域支援センターまで考えが至らなかった。そういう意味で、本当に東海地震になったら市町VCの立上げと運営だけで地元Vは胸いっぱいになっちゃうんだなーと思い、タイヘンさを共有した。	
広域拠点と広域連携を想定した図上訓練について共通認識がはかれ了吗か。	●「広域支援センター」という概念は理解可能だが、具体的に何の、どんな仕事をするのかは共通理解までいかなかった。またそのような議論はしていなかったし、する時間がなかった。 ●「広域支援センター」はどのような予算があり、誰が運営するのか(ボランティアが？役所職員が？役所職員と一緒に？)、前提そのものが、とにかく不明だった。 ●あることは解ったが仕事の中身についての共通認識まで至っていない。	●「広域支援センターのバックアップ機能を高める」というような命題の以前に、個々の市町村センターの支援をよそ者がどうやれるのか、で手一杯の感じ(現地によそ者が入れない、入るまで現地Vは何するかも不明、入ったあとの展開はどうするか…などのシュミレーションが十分にできてない)。 - 逆に、個々の市町VCに対しよそ者としてやるべき支援策を洗い出してみたら、その機能・役割を広域支援センターに担わせるような帰納法的な研究が必要かも。今回は仮説として「広域支援センターがあったら…」という設定だったのだな、と思った。
今後への期待・要望について	・皆、目的は認識しているが、議論が必ず状況対応的になり、どう静岡に入るかなどに集中する。時間を区切って、例えば 入る方法・ルート、市町村VCの応援方法、…とやらないと「課題の発見」という命題が進まないのでは。「課題の解決」は発見のあとに時間をとったらいいかも。	

F - 1 発災から 6 日目を各支援センターで想定する。	市町ボランティア本部の立上げ状況を確認し、被害想定に基づいた被災地の被災状況をイメージし、プレイヤーの共通認識をはかる。	
	対応できたことや確認できたこと	出された課題
県外チームは、それぞれの団体がどのような活動をしているかをイメージし、先遣調査隊及び本体の派遣計画、その期日・場所・ルート他団体との連携方法、独自展開能力についてまとめてください。	6 日目でも、どこから静岡に入れるか(ルート)に議論が終始した。伊豆は非常に難しいこと(陸路、海路とも困難)、北関東・東北方面の NGO は山梨経由で入るが、山梨も被害があることなどを確認し呆然。 【先遣隊】南関東チーム 神奈川-東海道ルートで進入(または海路)。PWJ は空路、企業のヘリコプターをチャーターし入るかも。北関東・東北 NGO は首都渋滞を避け、秩父—甲府—富士吉田方面から入る可能性。【本隊】先遣隊が入り交通網などが確立したら、本体を派遣。県外隣接地(富士吉田・小田原付近)にボランティア・デポの設置が必要。そのボランティア拠点と静岡県内主要ルートにボランティア・バスのピストン輸送が必要かも。 先遣隊:数日から1週間で入れる。本隊:1週間～2・3 週間。ただし本隊は現地に宿泊拠点の確保ができなければ入れない。 現地とは1・2日で応答可能かもしれない。ただし電話以外の独自の通信設備がないと難しいだろう。県外他団体とは即日に対応可能。 各団体の独自展開能力については討議せず。	● 侵入経路についての情報の入手 ● 先遣隊(数名)が「ルートや被害の確認のために入ることが仕事になる場合と、先遣隊自体が「被災地のコーディネーターとして現地 VC への協力をする場合」がありえる。 ● 特に後者の場合には早さが要求されるので、ヘリコプター等で「全国の災害 NPO のできる人」を数十人だけ各地に入れるようにすることが必要かも。(とすると、自衛隊・企業等ヘリコプターを持っている所に優先枠の交渉が必要) ● 皆、現地への情報収集を忘れていた。

F - 2 発災 7 日目を想定する。	市町ボランティア本部の後方拠点である支援センターが立ち上がり、市町 V 本部から被災地の被災状況やボランティアへの要望が入りはじめた。	
	対応できたことや確認できたこと	出された課題
県外チームも、静岡県災害ボランティア本部からの要請を受け、それぞれの支援センターに順次集まり、県内チームの対応状況をみながら、どんな連携支援が可能かを考えます。	(県内・支援センターのグループに分散。矢野は中部に入った。その様子) ・市町 VC の立上げ自体が不安。 ・他所から1週間も応援 V が来ないので VC 運営のノウハウを持ってる人がいない。 ・人がいない中でどんなボランティアができるのか、皆目わからない。 ・市町 VC 自体運営できないので、支援センターの運営は当面できそうもない。 ・孤立集落も予想され、自分達地元 V がやらなければいけないのだろうが、交通手段、ノウハウ等がなく、考えられない。	・他所から V が入ってきていない(1週間から3週間程度)時期の VC の動き方と、よそ者 V が大勢にきてからの動き方は全く様相が違ふ。(VC の役割を1期(最初期)、2期(VC 稼働期)と意識的に分けたほうがよいことが判明) ・市町 VC の応援は、上記1期、2期で全くニーズの出方、やり方が違うかも。(1期・最初期は、VC は住民自身の V 活動活性化による避難生活の支援。2期・VC 稼働期はよそ者 V による、積極的な課題解決をする等) ・支援センターは1期、2期で対応を変える。1期は避難所で自活を応援するためのノウハウ支援の要員を(市町 VC・避難所等へ)直接派遣。2期は支援センターに詰めて、外部からの V への情報提供など。

F - 3 発災 8 日目を想定する。	広域連携が必要とされている中で、中間支援拠点としての役割りについて考える。	
	対応できたことや確認できたこと	出された課題
県外ボランティアは、必要に応じて運営の協力・助言を行いつつ、要請があった場合の支援行動或いは独自行動について考えます。	県内チームは6日めのテーマで固まっており、中間支援拠点の役割まで考慮できず。	・県外チームも要請がでないので、アドバイスできます。 ・(今後は) 地域内の課題をこの段階で一度整理し、だからよそ者に「これをオーダーしたい」というのを出した方がいいかも。 ・全体と部分 (地元とよそ者) の両方あって、たしかに立体的になる。そういう意味でこの訓練は意味があった。目の前に課題があるとその対応を「私」がどうするかに終始しがち。必要なのは「よそ者」に○日後にこれをやってもらえるだろうから、私は今これをやる、という予知・仕分能力 (ルート・ファインディング) だろう。地元の V.C.O がその能力を是非もってもらいたい。

図上訓練チーム別報告書

西日本（記録者：栗田暢之）

	今回の訓練に参加したプレイヤーの総括について	
	確認できたこと及び思われること	出された課題・傾向について
訓練実施の目的について、プレイヤーの共通認識が図れましたか。	各地の災害現場で百戦錬磨の経験、あるいはこの訓練に意欲を持って参加された方ばかりであったので、自分たちはどのようにして支援が出来るのだろうか、最初から目的をしっかり認識していたと感じられた。	西日本としてまとめられたが、実際には大分、愛媛、兵庫、福井、愛知、山梨からの参加であったため、網羅的なシミュレーションにはならなかった。また、どの段階で実際に静岡入りできるか（静岡のグループに参画できるか）のタイミングが難しいと感じた。
広域拠点と広域連携を想定した図上訓練について共通認識がはかれましたが。	静岡の土地勘がないものが実際に地図を広げて各支援センター等の位置を確認できたことはよかった。また西日本各地からの応援部隊も、愛知側・山梨側といった入るルートによって役割分担できたことは収穫であった。なお、そのための訓練であることは、参加者は当然周知していた。	応援体制の円滑化を図るため、「バックアップセンター」の設置が不可欠だと議論したが、東海地震大綱に示されている支援センターがそれにあたるなどを実際に位置づけていくことが今後の課題である。
今後への期待・要望について	実際の災害現場でもそうだが、静岡の方々自身が外部からの応援部隊のおおよそのイメージをつかんでいただくため、事前に外部からの参加者の紹介があれば、応援メッセージも出しやすかったのではないかと感じた。また、静岡からの参加者には、静岡県が想定している広域支援体制の考え方をもっと周知しておく必要があると感じた。	

F - 1 発災から6日目を各支援センターで想定する。	市町ボランティア本部の立上げ状況を確認し、被害想定に基づいた被災地の被災状況をイメージし、プレイヤーの共通認識をはかる。	
	対応できたことや確認できたこと	出された課題
県外チームは、それぞれの団体がどのような活動をしているかをイメージし、先遣調査隊及び本体の派遣計画、その期日・場所・ルート他団体との連携方法、独自展開能力についてまとめてください。	愛知、三重、長野（南信中心）、山梨などは自県の対応に追われることを前提としながら、ただし、愛知ルート＝西部対応・山梨ルート＝中部対応は地元の地理に精通したものが対応すべきであるとして、全体の利益のためにバイク隊を編成して先遣隊を派遣しつつ、主要な西日本のメンバーに応援要請をする。翌日より東海3県以西のチームが浜松方面、北信越チームからは飯田および山梨南下ルート。愛知・長野・山梨にバックアップセンターを設置し、情報提供・交換を図る。独自展開は参加メンバーからは出されなかった。	机上の論理がいかに通用するかは大いに疑問。飯田・山梨ルートとも道路状況はかなり深刻になっているはずで、その通信手段も含めてより詳細な被害予測等に基づき、静岡県西部のボランティア等とも合同し、再検討する必要がある。特に北遠はボランティアはおろか、県の予測でも孤立集落との道路確保等に30日程度を要するとされ、極めて深刻なことが確認できた。

F - 2 発災 7 日目を想定する。	市町ボランティア本部の後方拠点である支援センターが立ち上がり、市町 V 本部から被災地の被災状況やボランティアへの要望が入りはじめた。	
	対応できたことや確認できたこと	出された課題
県外チームも、静岡県災害ボランティア本部からの要請を受け、それぞれの支援センターに順次集まり、県内チームの対応状況をみながら、どんな連携支援が可能かを考えます。	東日本チームと合同の作戦会議を開催し、西日本は西部・中部の対応中心、東日本は東部・賀茂の対応中心に支援することで合意。それぞれの情報はバックアップセンターで集約し、互いの情報交換と全国に発信することにした。まずは、それぞれの役割に合致した地域に現地入りし、必要なひと・もの・かね等の情報を収集し、本格的な支援体制の整備に務めることにした。	当初は静岡の各地区チームからの応援要請を待つことにしたが、顔がわかる関係になっていないこと、静岡自身が応援要請するところではない混乱した状況にあった等により、適宜、他県からの応援団として乗り込むことになった。訓練だから許されるようなものの、本番でこれが原因となってさらに現地を混乱させるようでは、過去の被災地の二の舞だと感じた。

F - 3 発災 8 日目を想定する。	広域連携が必要とされている中で、中間支援拠点としての役割りについて考える。	
	対応できたことや確認できたこと	出された課題
県外ボランティアは、必要に応じて運営の協力・助言を行いつつ、要請があった場合の支援行動或いは独自行動について考えます。	県内 4 箇所の支援センター以外にも、さらに細かく地区を包括した支援センターの出先機能的役割を担う新たな拠点が必要だとのこと。どうやら孤立集落への対応等を図る場合に、必ずしも支援センターの建つ位置が全体を見渡せないとのことである。県外ボランティアとしては、取り急ぎ支援センターという発想ではなく、この地域の状況をよく把握しているキーパーソンともよく話し合い、その小地域を包括する出先機関に意識的に入るなど、地域事情を十分に確認しなければならないことを学んだ。	それではそのキーパーソンは誰なのか。実際の現場でそれらの状況が、戦略として外部まで伝わるのか。様々な問題点と課題を残すことになった。また自県内の他団体との連携や連絡体制、協力関係などがある程度徹底された状態でないと、せっかくの現地からの発信に、十分応えられないという懸念が残る。静岡のことばかりでなく、自県のネットワーク整備等にもこのような訓練を活用し、考えておかないといけないと痛感した。 皆様、お疲れ様でした。またやりましょう。

災害ボランティア情報支援について

１．災害ボランティア情報支援の経緯・目的

被災地の災害ボランティアセンターでは、災害状況の推移に応じて変化する被災者や救援・支援者の情報ニーズに対応するための情報発信について、人員の面や設備の面などから、十分な対応ができていないという課題があった。

一方、被災地での救援活動を検討する多くの災害ボランティア団体等では、その活動についての時期や規模などについての判断を行うに当たり、直接被災地の状況調査を行ったり、現地受入れ準備などをそれぞれが独自に行う傾向が強く、そうやって集まった情報の多くが、他団体等と共有できていないという課題があった。

このような被災地側と災害ボランティア団体側にある「情報」に起因する課題を解決するためには、被災地からの情報発信を支援し、その情報を共有できる仕組みが必要であり、これを実現することが全国のボランティア団体等の被災地救援活動を支援していくことになると考えている。

２．被災地からの情報発信支援について

24時間 365日体制で危機管理情報を収集している危機管理情報センターにおいて、全国の災害発生状況を監視し、発災後はその被害状況を勘案して現地に情報支援スタッフを派遣。被災状況と救援ニーズについて情報発信の支援活動を行う。

具体的には、現地ボランティアセンターからの情報発信支援を行うため、

- １・スタッフの派遣
- ２・情報発信に必要な環境の整備（通信環境、ウェブページの設置）
- ３・情報支援活動（情報整理、ウェブページの更新）
- ４・現地での情報ボランティアの確保
- ５・センターの運営、事務処理に必要な機材の調達及び提供
- ６・その他、上記に関連する事項

などを行う。

３．被災地からの情報の共有について

平時から全国の災害ボランティア団体等における情報共有を図り、発災時にもそれを生かした救援活動に必要な情報の共有を支援する。これによって、各団体が被災地での救援活動を行う検討を行う場合に行ってきた被災地での事前調査などの負担の軽減化を図る。

また、被災地の救援ニーズ情報を基にした救援活動が可能となることで、よりの確な救援活動の実現が可能になると考えている。

具体的には、ボランティア団体に対して、

- １・危機管理情報配信及び会員間の情報共有ツール（3rdWATCH-EX）の提供
- ２・災害ボランティア関係者メーリングリストの提供
- ３・情報支援スタッフを通じた現地情報の提供

などを行う。

４．社会的情報共有の実現に向けて

被災地からの情報発信の支援、平時からの災害ボランティア団体間の情報共有支援を通じて、

災害状況の推移に応じて変化する被災者や救援・支援者の情報ニーズを満たす社会的な情報共有を実現するために、

1・災害ポータル運営

2・災害ボランティア団体からの現地情報の収集

3・現地サイトや災害ポータルへの導線確保

などを行う。

以 上